

「女性登山家」としての野口幽香 ——E. P. ヒュースによる女性への登山奨励を手がかりに——

小橋玲治 (人文学部日本伝統文化学科)

Reiji KOHASHI (Department of Japanese Traditional Culture)

1. はじめに

野口幽香 (1866～1950) は、現在も続いている二葉保育園 (開業当時は二葉幼稚園) を森嶋峰とともに立ち上げた創設者であり、その二葉幼稚園は日本における貧困層のための幼児教育の先駆けとして知られている。野口の人生については、貝出寿美子『野口幽香の生涯』(キリスト新聞社、1974年)が最も詳細な伝記となっているが、研究自体はそれほど多くはない。二葉幼稚園に関する研究そのものも決して多くはないものの、『園誌』の翻刻資料さえある¹⁾のに、「野口幽香」を CiNii で検索をかけて論文の題目にその名が入っているものは、近年では松本園子「野口幽香と二葉幼稚園 (1) 先行研究の検討」、『淑徳短期大学研究紀要』46号 (2007年) しかなく、しかも (1) と銘打たれているものの、(2) 以降に関しては、少なくとも CiNii では出てこない。

当然のことながら「野口幽香」の名が出てくるのは幼児教育という枠組みの中であって、それ以外の場で登場することは皆無と言っても過言ではない。しかしながら、筆者は本稿で野口の別の側面を取り上げたい。それは「登山家」という顔である。

先述のように野口は二葉幼稚園の創設者のうちの一人であり、麴町下六番町で最初に開業したのは1900年のことであった。その6年後、1906年の3月に三大貧民窟の一つと言われていた四谷鮫河橋に幼稚園は移転した。そしてこの年の8月、彼女は岩手山に登り、その登山記を残しているのである。

日本における女子登山は、まさにこの時期が黎明期であった。

(…) 信州、長野県で、Hughes の講演と同年の1902年、日本人女性による登山の歴史において画期的なことが起こった。長野高等女学校で集団登山が始まったのである。校長の渡辺敏 (1847～1930) は同校の創設者でもあり、長野の女子教育に貢献した。その渡辺は同校での集団登山について、「たとえ死するものがあるとしても、二百九十九人迄の人の精神身体の訓練上、利益あり、国民教育上有用の事と信ずる以上は、一人位の死者ありとするも、忍んで之を実行せざるべからずと信じ」(協会報第一号、引用は『日本女性登山史』p.40) と、並々ならぬ決意を以て望んでいたことを明かしている²⁾。

イギリスの女性教育者 Elizabeth Phillips Hughes (1851～1925) が教育視察のために来日、女性たちに向けて登山を推奨する講演を行い、時を同じくして長野県では女子校における初の集団登山が戸隠山で行われた。その3年後の1905年、日本で初めての山岳クラブ、山岳会が結成、その機関誌である『山岳』の最初の号には、引用部にある長野高等女学校と同じ長野県下の教員が登山記を寄せ、以下のように女性による富士登山の歴史について語っている。

余は熱心なる、女子登山希望者である、曩きに三河国の某女が、下駄がけを以つて富士登山の先駆をなし、野中千代子が雪中一万二千尺の山頂に悲壮なる籠居を敢てせし以来、奈良朝の昔、金峰山の女尼が、六尺男児を後へに瞳諾たらしめた底の女子が、追々増加して、三十五六年頃からは、各地女学校の団体が追々富士登山を試みる様になつたのは、実に喜ばしい現象である。余の記憶に存して居る者のみにても、此二三年に、富士登山を試みたのは余程ある、即ち三十六年には女子美術学校の生徒が登り、三十七年には山梨県師範学校女子部、女子体操音楽学校（二十余人中二人疲労）神奈川県高等女学校等が登つて居る、此外嘉納氏夫人は三十六年に単独登山を行ひ、板垣伯、原敬二氏夫人は、その翌年に登山を企てられたそうである。特に今年は樺山伯の孫女が、垂髻のろうへしさを以て、緋小な足跡を山上の火山灰に印したと聞いては、眉を描き、眼尻を塗り、蘇芳に頬を染むる女学生すらある今日に、吾党のため実に大なる援助を得たものと思はれて、うれしい尤も右に述べたのは、皆新聞紙上に表はれた者のみであるから、勿論吾人の視聴に触れない、幾多の巾幗登山者があつたに相違ない、(…)（久保田柿村舎「女子霧ヶ峰登山記」、『山岳』第一年第一号、1906年、p.79、以下引用に際して旧字は新字に改めている）

この登山記の作者である久保田柿村舎とは、実はアララギ派の歌人・島木赤彦その人である。当時島木は地元の長野県で教員をしており、1903年に女子生徒20数名を引率して八ヶ岳に、1906年には15名を引率して霧ヶ峰に登つたのである。

このように、1900年を超えた頃から女子登山は急に活発になっている。久保田＝島木赤彦が言及しているのは主に女子富士登山についてなので、言及していないだけで知らなかったわけではないのかもしれないが、お膝元の長野県内で高等女学校初の集団登山が始まったのが1902年なのだった。

この流れから言えば、岩手山に1906年8月に登つた野口幽香も立派な「女性登山家」の先駆者に数えていいだろう。しかしながら、先述したように野口幽香の数少ない先行研究は「幼児教育」という枠組みの中においてであり、貝出の伝記にも、その年譜には岩手山登山の事実は書かれておらず、重要なものとして見なされていない。筆者はこれまでにE. P. Hughesの前記の講演、「登山のはなし」が日本の女性たちの登山に実質的な影響を与えたのかどうかについて検討を行ってきたが、長野の女子校における集団登山はたまたま時を同じくして起こっただけで、直接的な影響があったとは言い難いものであった³⁾。E. P. Hughesに注目したのは、世紀転換期のこの時期における女性教育者たち同士の、国の垣根を超えた交流がどのような影響を生んだのかを探るためであり、野口という個人の「女性登山家」が登場したのも、その余波の一つとして考えられまいだろうか。本稿ではまず、野口の岩手山登山にHughesの影響がないかを探る。そして、彼女の残した登山記から、初期「女性登山家」である野口幽香の紀行文の特徴について考察し、これまで顧みられることのなかった野口の幼児教育者以外の顔についても解き明かしてみたい。

2. なぜ「岩手山」に登つたのか？

野口の登山記に具体的に踏み入る前に、そもそも彼女はなぜ岩手山に登ることに決めたのだろうか。野口の登山記は『山岳』第一年第三号に掲載された。すなわち、『山岳』創刊の同年には、すでに女性自身による登山記が掲載されたということである。その中で野口は、岩手山に登る決心をした理由について以下のように述べている。

去年の夏なりき、われ暑を避けて播州塩屋にあり。一夕妹の病に侍して、夜深くるがまゝ、日本園芸雑誌第十八年八月号白馬登山の紀行を読み、余りの面白さにわれも亦いつかは此味をなめでは止まじと其夜心に決しぬ。

此の煩なる、果して我望の達せらるゝや、われながらあやぶめど、軽々しう言葉に現はして、幾歳月を繰返す其間、人に語り自ら考ふるのみにても吾には楽しきなり、爾来吾はたゞ来年こそは岩手山にと人に語るが面白くて、定めたるともなくたゞ語りき。

一年過ぎ去りていよ一夏休も近くうなりぬ。岩手山岩手山と繰返したる吾心は、いつの間にやらんほんとうに岩手登山を決したるなりき、われはかく空想の如くに語り興ずる事を、終には実行するを又吾自ら面白く思ふなりけり。(野口幽香子「初登山(岩鷲登山記)」『山岳』第一年第三号、1906年、p.121、以下野口からの引用は注記のない場合は同文から)

これを読んでも野口が岩手山に決めた理由は明確にはならない。白馬登山記を読んだのであれば、普通は白馬登山を志すのではないか。標高2038メートルを誇る岩手山は、盛岡市内ならばどこからでもその雄大な姿を仰ぎ見ることができ、後には深田久弥が日本百名山の一つにも選んだ、岩手県を代表する山である。野口が岩手、そうでなくとも東北出身の人ならば、岩手山に登ることに決めた理由にも納得がいくが、そうではない。彼女は兵庫の出身で⁴⁾、東京師範学校女子部入学のために上京したため、岩手とは縁もゆかりもない。その彼女がなぜ登山をするに際して岩手山を選んだのだろうか。推測の域を出ないが、同窓で年下の友人である安井てつ(1870～1945)から教えられた可能性を指摘したい。

安井は東京師範学校女子部卒業後、岩手県師範学校に着任している。当時の岩手の教育関係の資料には、安井の着任時の辞令も附されている。

辞令

女子高等師範学校訓導安井テツ子任岩手県尋常師範学校訓導(月俸式拾五円)岩手県尋常中学校助教諭試補佐藤亀吉氏任同中学校助教諭(月俸式拾円)

(『岩手学事彙報』第258号、1895年4月15日)

同時に別の学校に着任している男性教員よりも高い給与を得ていたことが分かる。同時期の他の教員たちの着任時の給与を見ても、安井が高給取りであったことがうかがえる。

野口に縁のある人物で、さらに岩手に地縁のある者となると、同窓であるこの安井がまず想定される。安井が二年だけ在住した岩手にどれだけ愛着があったかは定かではないが、東京に戻って後樋口一葉の下で日本の古典の勉強をしていた安井の許に岩手から林檎が届き、樋口家にもお裾分けしているので、離れて後も関係は続いていたようである⁵⁾。

安井は文部省の命でケンブリッジに留学し、そこで師事したのが、日本で女性に対して登山推奨の講演を行ったE.P.Hughesであった。安井はその講演の際にはHughesの通訳も務めており⁶⁾、先述のようにその講演が実質どこまで女性たちに影響を及ぼしたのかは定かではないものの、安井を介して野口にはその登山熱が伝播したということも考えられるのではないだろうか⁷⁾。

野口は登山の何に心を動かされたのだろうか。Hughesは講演の中で登山の効能として六つの項目を挙げている。『婦人衛生雑誌』第149号(1902年4月25日)に掲載されたミス、ヒュース君演説、安井哲子君通訳「登山に就て」から引用したい。

一点目、「骨の折れる運動」とHughesは言う。「何れの国でも婦人は男子に比較して見ますると、骨を折つて仕事をするやうなことは大変に乏しく、さう云ふ機会を得ることは誠に少ないの

で、殊に上流の御婦人方は郊外に於て運動することなども極く稀れであらうと思ひます、(…) 身体に十分な運動を得ることは上流の婦人方には一番良いだらうと思ひます。」

二点目に「広々とした郊外の空気中に居る」と述べる。「婦人は一体神経質のものであり又感情的のもの」で、「これがどうしたならば癒るか」と云ふと、広々とした郊外の空気中で遊ぶのと太陽に曝されるのとの二ツであります、」

三点目に「山の上にある最良の空気を呼吸する」のが良いと言う。「(…) 今まで社会に居つて色々の生活の困難を感じて居ることも忘れて仕舞ひ、つまり自分の身体も精神も亦今までの幾多の困難も皆忘れて仕舞ひます位でございます、」

四点目、「登山は勇気を養成するに必要である」とする。「それで此世の中が進歩致しまするに従ひ女子に対するタツタ一つの理想が色々に増して参りまして、女子が本統に幸福であり此世の中に有益であると云ふのは何であるであらうかと云ふ事が少しばかり分つて参りまするに従つて、どうしても勇気が必要になつてまゐります、」

五点目として「非常なる快樂、或は幸福を与ふる」と言う。「且又雪の積り積つた上に輝く日光であるとか、実に恐ろしい氷の山であるとか、或は雪顔れが落ちて来る有様とか、或はギザギザした山であるとか、云ふ様な非常なる莊嚴の景色を現はして居りますから、其景を見た感情と云ふものは、其觀た時のみならずこれを後から想出した其記憶からも愉快を取ることが出来ます、」

最後の六点目は、「過度の精神活動を癒しますには登山は良薬でございます」。「一体活発な脳髓を持つて居る人は常に其職務其他の上に心を使ふ者であります但し登山する時には心も身体も強く筋肉運動に向つて働いて居ります、」

それら全てを踏まえて、「日本の御婦人、殊に貴婦人方は将来日本に向つて色々成さるべき仕事を持つて居られませうと思ひますから、其仕事をするに就いて、私は此処に二ツの必要なことがあるだらうと思ひます、其一ツは何かと云へば高尚の教育を受けること、二ツには好い慰みを得ると云ふことが必要だらうと考へます、それに就て体力も同時に発達させなければならぬと思ひます、其体力を養成するには色々方法もございませうが、僅かの費用を以て僅かの時間に目的を達し得るのは登山であると思ひます (…)」とまとめている。

現代から顧みて、この Hughes の登山論からは多くのことが見えてくる。一つ目は、これが単純労働よりも頭脳労働に従事する上流階級の女性向けの講演ということである。すなわち、ここは「大日本婦人衛生会」という場であつて、総裁は岩倉具視の三男、具定の長女で後に海軍大将となつた小松宮依仁親王の妻、周子、会長は侯爵鍋島直大夫人である鍋島栄子、副会長は帝国大学第三代総長、文部大臣を歴任した濱尾新の夫人である濱尾作子⁸⁾、そして幹事・評議員には当時の貴族の夫人たちが名前を連ねる。この会場にそのような貴顕たちまでもが列席していたかは定かではないが、頭脳労働に従事する女性たちを意識した講演であることは間違いない。

次に、女性と男性の区分を明確に意識した内容であるということだ。「日本の御婦人」と断つてから話しているところからも、ジェンダー規範を Hughes 自身が意識して語っていることがうかがえる。

最後に、体力作りという位置づけとして登山を推奨している点である。Hughes は日本においてスウェーデン体操を推奨した先駆者でもあり、そういった観点からの先行研究もある⁹⁾が、体力の基盤づくりとして登山も無視できるものではない。

そう考えると、野口が岩手山を選んだ理由だけでなく、そもそも登山を行った理由もこの Hughes—安井の線から見えてこないだろうか。野口の年表を紐解くと、この登山の前後に病気に關する出来事が起こっている。二葉幼稚園を設立した 1900 年 6 月、彼女は安井と同様文部省外

国留学生に任命されるものの、翌年病気のために辞退した。そして登山の直後の1906年10月から翌年1月まで、結核療養のため茅ヶ崎の病院で静養している。野口は健康に不安を抱えていたのである。白馬山の登山記を読んでその面白さに触発されたと述べてはいるものの、病に負けない体力を培いたいという思いも、この登山の背景にはあったのではないだろうか。これが直接Hughesから示唆されたものかどうかまでは明らかにできないが、疾病の中間地点にあった野口にとって、登山が魅力的なものに映じたとしてもおかしくはあるまい。

3. 日本における女性の登山

1900年以降に女性による登山が活発になっていったと述べたが、そもそもなぜ女性は山に登らなかったのか。

Hughesも日本における女性と登山の関係に触れている。

日本では宗教的の意味で登山をなさる方が多いさうですが又同じ意味で婦人の登山を禁ぜられて居りまして、近世に至るまで婦人が或山に登ることを許されなかつたと云ふやうなことに承つて居ります、(『婦人衛生雑誌』第149号)

すなわち、女性は山に登「ら」なかったのではなく、登「れ」なかったのである。「神社仏閣ノ地ニテ、女人結界ノ場所有之候処、自今被廢止候条、登山参詣等可為勝手事」と、太政官布告第98号が出され、発令されたのが1872年3月27日と、たかだか30年前のことで、このような迷信を払拭するのに十分な時間とは言えまい。そしてそれは、ジェンダー規範として女性たち自身も内面化していたものであろう。

ここでHughesが述べている「或山」とは、霊峰・富士山のことである。富士こそがまさに「女人禁制」の象徴的な場であった。しかしながら、駐日イギリス公使パークス夫人は布告で撤廃される以前、1867年10月に富士山頂に到達しており、外国人女性に対してはそのような規制は無意味であった。実はパークス夫人に先立つこと35年、江戸時代の1832(天保3)年に高山辰という女性が、161回富士山に登ったといわれる小谷三志にともなわれて登ったという記録があり、この登山には「女性解放」の意味合いがあったという見解もある¹⁰⁾。

創作ではあるものの、江戸時代の富士登山については山岳小説の大家としても知られる新田次郎の「女人禁制」で描かれている。

お加根に暇を取らせて、どこぞにやって、男の修行と、唾の修行と、山登りの修行をさせるがいい。一年ほどたてば、きっと役に立つような男姿の女になるでしょう。(引用は『新田次郎全集』第19巻、新潮社、1976年、p.272)

男のふりをしているでも声を出せば女であることがばれてしまうため、声も出せないふりをしなければ山にすら登れない。創作とはいえ、女性にとって富士登山がいかかに不可能なものであったかを示唆している。

時が明治に移り、その明治の末年にあっても、以下のような意見もある。

私は毎年夏になると高山に登るのを楽しみにしてあるが、未だ実は婦人と一緒になつて、登山したことがないので、婦人の登山といふ題に就き、経験上のお話をする事が出来ない、(…) 富士山だけは、私は何人にも勧めますが、その外は、婦人には冒険に類したことになりますから、いくら浩大な自然に楽しむのが宜いからと言つても、勧める気になりません。(小島烏水「婦人の登山」、初出は『女子文壇』第三卷第十一号、1907年8月、引用は『小島烏水全集』第3巻、大修館書店、1984年、pp.707-710)

これは野口が登山記を寄せた『山岳』の発行元である山岳会の会長、小島烏水によるものである。小島烏水らによって1905年に山岳会が創立、1909年に現在の「日本山岳会」に改称した。1906年4月5日には、『山岳』第一年第一号を発行した。主な会員には、第一号から会員の小内薫、久保田俊彦＝島木赤彦、特別会員には博文館の編集者である坪谷善四郎、評論家で『日本風景論』の著者として登山を奨励した志賀重昂や、画家の天下藤次郎、新派の女形である喜多村緑郎の名も見える。そして野口幽香の名は、第二号会員氏名欄に「東京市 野口幽香子」とある。その会員欄に記載の名前から判断するしかないが、女性の名はほとんど見られない¹¹⁾。上の小島の言は1907年のもので、すなわち野口の登山記が『山岳』に掲載された翌年のことである。にもかかわらず、その発行元の会長ですらこのように述べているのであり、なおさら野口幽香という女性による登山記の重要性が分かるであろう。

4. 野口幽香の岩手山登山記

男性による岩手登山記にはどのようなものがあるのだろうか。

幸田露伴は1893年刊行の『枕頭山水』に岩手山に登った際の紀行文を載せ、それについて田山花袋が言及している。

露伴氏の文章は、朝のあたりがいかにも好い。いかにも暁を侵して山に面して行く心持が身に沁みて来るやうな気がした。余りに山の険しいのに愛憎をつかして、途中から下山する形も、いかにも長い旅の中の出来心の登山の心持をよくあらはしてある。文章もイヤに型に捉はれずに、自由に書いてある。

と評している。「自由」な点を押しているのである。(小林一郎『田山花袋研究—「危機意識」克服の時代(三)一』、桜楓社、1983年)

志村烏嶺という人物は、次のように述べている。

月黒き夜に白河の古関を越えて、征夫か秋風に袂をしばりし古を追想し、今朝梧桐の一葉落ちて秋をば聞けども忘れ兼ねたる「信夫の山の春風の頃」吾が胸に絶えず燃え立つ、吾妻王の烟、今日も北天に靡けり、千賀の浦に扁舟を浮べ、五山、七浦、八百八島皆我が旧知、瑞願寺に扶揺万里の風を待ちて、一度び凶南の鵬翼を張らんとして雄志遂に蹉跎せし梟雄の英魂を吊ひ「上国の戦塵飛んで到らず、東風占断す六十春」と歌はれし藤原氏三代の榮華の跡を平泉に訪ね、萌ゆる夏草に万斛の熱涙をそゝぎ、幾多の長短亭を駛走して鉄車遂に盛岡に入る。(志村烏嶺「奥の富士(岩手登攀記)」、小原兄磨『巖手山記』、岩手山講社、1920年、p.250)

上の二つの登山記は、岩手山神社の宮司であった小原兄麿が編纂した『巖手山記』にも転載されているものだが、野口のものには収録されていない。これら男性による登山記と比べ、実際に登るに至るまで相当量の文章を費やすのは同じとしても、野口のものとはそれほど時代がかった調子ではない。そして、一読して植物に関する記述が多いことに気が付く。

枯枝に手も落ちたるにや、ブチリ〜と音して、そこら八千くさの花盛りなるもかまはゞこそ、知らぬ顔して引つぱり行く。危しと思ふ事屢々なるも、果てはそれにも慣れて、両傍の女郎花桔梗など、一面に咲き乱れ、余りの美しさに、我も人も歓呼の外凡てを忘れてたり。其又美しかりし事よ！行けども〜花は尽きず。或は広く或は狭く、時には馬車にふれする〜と音して女郎花の去りゆくなど花見ん為の此徐行かと、喜び限りもなし (p.123)

試みに、野口の言及している草花を列举してみる。

・鈴蘭 ・モウセンゴケ ・マヒヅル草 ・ムシトリスミレ ・チングルマ ・ツルコケモモ ・チシマセキショウ エゾツツジ ・コマクサ ・岩ブクロ ・高根スミレ ・岩カスミ ・梅鉢草 ・白山千鳥 ・白根ニンジン ・何トカシホガマ

「それから名を知らぬ黄色や、紫や、恰も敷きつめたる様に、足を容るゝ所もなき庭の、如何に美しかりしか。」と、名も知らぬ草花が多いと述べているものの、識別できている草花も非常に多い。なぜ野口はこれほどまでに植物を個別認識できたのであろうか。もう一度「岩手登山記」の冒頭を引用したい。

去年の夏なりき、われ暑を避けて播州塩屋にあり。一夕妹の病に侍して、夜深くるがまゝ、日本園芸雑誌第十八年八月号白馬登山の紀行を読み、余りの面白さにわれも亦いつかは此味をなめでは止まじと其夜心に決しぬ。(下線は筆者による)

野口は園芸雑誌を読んでいたために、そのように識別が可能だったのであろうか。しかしながら、野口の記述には誤りがあり、この白馬登山の紀行が載った『日本園芸雑誌』は、正しくは第17年夏之巻である。著者は五百城文哉、記事名は「白馬岳」である。五百城は高橋由一門下で、小杉放庵や、青木繁の妻・福田たねの師としても知られる洋画家である¹²⁾。五百城は高山植物を中心に植物画を得意としており、だからこそこのような登山記を著したのであろう。実際、五百城の文中には多くの植物名が登場する。

幾度かトンネルを出入して花は益多く、中にも鮮麗なる紅花の夥しさを見て棲碧思はずアツト叫び、花の形状は正にマメ科の草と思へど如何なる植物ならんと瀕りに思案の体、愛山の器械取出して写真したき程なりし。妙義の復讐此時なりと微笑して、此草は如何にもマメ科の品にてシャヂクサウと呼ぶ、信州特産の花ながら、到る所に自生して珍と為すに足らずと一本参つたれど、其実予も愛山も初対面の花にて、棲碧がマメ科といへるより思出したる臨機の講釈談に棲碧の鼻は全く凹みたり。(五百城文哉「白馬岳」、『日本園芸雑誌』第17年第8号、1905年、p.71、以下同様)

愛山、棲碧は同行者、もう一人ここでは名前が出てこないが其蛸と五百城（文中では齧菜）の四人で白馬を目指し、途中様々な花を採集している。

湖畔タスキモの花夥しく、一行の足を止めたり。湖の北岸は南北の分水点にして、是より以北の水は皆信に発して直ちに越に入る。長くして緩やかなる坂を下れば神城村なり。カハラサイコの花の余りに美なるに欺かれて一同馬車を下りし時、不図発見したるは齧菜が写生帖の紛失なり。（同 p.74）

白馬・鐘ヶ岳の裾野にて眼界広く、キキョウ・ヨミナヘシ・マツムシサウ・ムシヤリンドウ・キセワタ・ユウスゲ・ルリトラノヲ・ハギ等の時を得顔に咲き乱れる中にも、カハラサイコとシナノナデシコは一層際立ちて美なり。（同 p.76）

以上のように、その美しさに注目した記述もありはするものの、基本的には植物の名が出てくる際には列記されていて、その見方は画家という職業柄であろうか、客観に徹している。

ちなみに前掲の志村烏嶺（1874～1961）は、栃木県で教員をする傍ら、高山植物の採集を行っていた人物で、先の「奥の富士（岩手登攀記）」にも植物に関する記述がある。

此付近に於て。余が注意を牽けるはミヤマハンセウツル、ハクサンチドリ、ウスユキソウ、ハハマツ、等なり特にチングルマの一面に繁殖せるを見ては狂喜せざる能はず、日本アルプス地方に於ては、本種も普通七千尺以上の地に之れを見るなり、（p.253）

同じ植物に相對した時、野口と五百城、志村の違いはどこに見られるであろうか。志村の「狂喜」は、非常に珍しいものを見たという、植物の生態の方に主眼があることが分かる。そこには野口のような「美しさ」に対しての素朴とも言える感情はない。五百城は「美しさ」に言及してはいるものの、どちらかというと観察に徹している。

岩手山の植物に関する記述は、他にも見られ、それは『博物学雑誌』といった学術的な媒体に見られる。

(…) 黄花鮮美なるツルキンバイは、美しく刻みある葉を着け源湿の地に群生せり青き三ツアフヒ白きサジオモダカ水上に清し。萎れゆくマツヨヒグサの花に、日の高く昇れるも知られ、盛町に着きしは、八時なりき。（鳥羽源蔵「岩手山紀行（第一稿）」、『植物学雑誌』第6巻第64号、1905年、p.22）

ここには確かに「美しい」という表現は見られるものの、野口のように感情を露わにするようなものではなく、その花の一属性としての美しさを述べているかのようである。

実は、五百城が寄稿したこの『日本園芸雑誌』の同号には、野口自身も文章を寄せている。この号は、他の号に増して執筆陣が豪華で、巻頭から大塚楠緒子、幸田露伴や井上哲次郎、鳥居龍蔵、川東碧梧桐、山川健次郎、成瀬仁蔵、高浜虚子、中村不折、塚本はま子、内藤鳴雪、そして夏目漱石と、牧野富太郎のように普段から寄稿している執筆陣とは明らかに異なる人たちからの文章が掲載されている。その最後に「華族女学校助教授 野口幽香子」による「その子の花」が載っている。

誰しもその幼ない時を回顧なさいましたならば、野に遊んで草花などをお摘みになりました御経験のあることで御座いませう。私も小児の時分にはよく野原へ遊びにまゐりましたが、その野辺に月見草が咲いて居りまして、あゝ美しいと感じましたその時の光景は今でも眼の前に浮んでまゐるやうで御座います月見草は田舎に行きますと沢山咲いて居る花で御座いますが、その姿は牡丹・芍薬に飽いて居る都人の眼に触れるのを恐るゝかのやう、態と日中を避けまして、夕方に鄙の少女が家路に急ぐ足をしばし止めて、あゝ美麗なことゝいはれるのを第一の慰藉と致して、あとは月を友に、物静かな夜を世界として、清い気高い色を放って居ります。この花に対かひますと、私は何時でも幼ない時のことが偲ばれまして、それからそれへと空想が走せてまゐつて、時としては浮世の隠れ家をこの一本の花に得ることも御座います。(野口幽香子「その子の花」、『日本園芸雑誌』第17年第8号、1905年、p.117)

この後野口は、もしも子どもが産まれたならば、身近にあるその季節の花を「その子の花」と定め、様々なものにその花の模様をつけ、子自身にはその花を植えたり培養したりすることを奨め、その花への趣味を持たせるようにしたならば、その後の人生において「失望や煩悶を慰める友」となるであろうと提案する。登山記の一年前のこの手記に、野口自身の登山記の特徴、すなわち草花との関係性が垣間見えるであろう。野口が花を見る際、そこには明らかに物語性がある。無論登場する全ての植物に対してそのように接しているわけではないものの、登山の途中で出会った草花への記述には、野口の感情が明らかに見え、それは植物学者をはじめとした男性たちの著した登山記における植物の描かれ方と異なるものになっていると言えるだろう。

5. おわりに

野口の登山記は次のように終わっている。

月明らかに、ふりかへれば南部富士の姿、あり〜と手に取る如く見ゆ悔しき限りもなし。きけばわが登りし前夜は頂上月よかりしといふ。此夜は頂上の景や如何ならん。げに女人の登山、山の神のたゞりし事よとあきらめぬ。厨川へ着きしは夜の十時なりき。(p.131)

雨が降ってきたために途中で下山せざるを得ず、それに対して女性の登山が山の神のたたりにあったかと嘆く野口からは、やはり女性による登山を珍しいものとする自認がうかがえる。その野口が、女性による登山記そのものが稀少なものであるということを認識していたかまでは定かではない。しかしながら、彼女の草花に対する眼差しは、期せずして自身の登山記を他の男性たちによる登山記とは異なる趣向のものとしている。

と同時に興味深いのは、前掲の登山記自体の結末のさらに後に、この登山にかかった費用と、さらには現地で雇った人夫の名前まで載せていることだ。普通の登山記では見たことのない情報である。野口には一方ではこのような現実的な面もある。

これまで野口については幼児教育の先駆者という位置づけが先行していたが、彼女の著した「初登山(岩鷲登山記)」を具体的に検討していくことで、その「女性登山家」としての面の幾許かを明らかにすることができたのではないだろうか。そしてそれによって、20世紀初頭という時代において、女性教育者同士の国の垣根を越えた交流の一端に、日本における幼児教育のパイオニアである野口幽香子が敢行した登山も列記しえるのではないかと提言して本稿を閉じたい。

本稿は2019年11月24日に行われた日本近代文学会・昭和文学会・日本社会文学会合同国際研究集会での口頭発表「『女性登山家』野口幽香の紀行文」に新資料を付し、大幅改稿したものである。その際会場で質疑応答をいただいた方たちには、この場を借りて御礼申し上げる。特に目野由希氏からいただいた、海外のレディー・トラベラーたちの紀行文との関係については、本稿でもパークス夫人に言及していながら、虚を突かれた思いであった。直接的な関係がなかったとしても、対比研究としては可能であり、今後の課題としたい。なお、本研究はJSPS 科研費17K02661「女性教育者とその Transnational Network に関する比較文学的研究」(2017～2019年度)の助成を受けたものである。

注

- 1) 松本園子『『園誌』にみる二葉幼稚園創設期の運営一附・翻刻資料/二葉幼稚園『園誌』(一九〇〇～一九〇六年)』、『東京社会福祉史研究』1号(2007年)、庄司拓也、松本園子「翻刻資料 二葉幼稚園『園誌』(一九〇六・九～一九一三年)』、『東京社会福祉史研究』9号(2015年)。
- 2) 拙稿「E.P. ヒュースによる女性への登山奨励の余波—タイへの影響も視野に」、『タイ国日本研究論集2019』(チューラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座、2019年)
- 3) 同上。
- 4) 彼女の三歳下の弟が、建築家の野口孫市(1869～1915)である。孫市は住友家に雇われ、今も現役として利用されている大阪府立中之島図書館などの設計にあたった。住友家は関西を地盤とする財閥であったため、孫市設計で現存するものは関西に多い。
- 5) 「水のうへ日記」明治28年10月9日には、前任地である岩手から届いたという林檎を手土産に持ってきたことに対し、「常ハ口重に世辞など数々なき人なれと心にしみてうれしとおもふ事のあれはかく取」わきての事なともすめり 可愛き人のこゝろよと母も妹もひとしくいふ」とあり、一葉は彼女の人柄を好ましく思っていたようである(『樋口一葉全集』第三卷(上)、筑摩書房、1967年、p.450)。なお、余談となるが、安井が岩手を去って後1898年に岩手県尋常師範学校は岩手県師範学校に改称し、その校友会が1903年7月に第1号を発行した『校友会雑誌』は文学史に少しだけ顔を覗かせている。この第5号を、同校の出身で歌人の小田島孤舟から寄贈された石川啄木が、「岩手県師範学校校友会雑誌を読む」を『岩手日報』に1905年8月4日から15日まで7回連載した(『啄木全集』第4巻、筑摩書房、1967年)。
- 6) 安井とは別の講演の際の通訳を務め、Hughes や女子英学塾のA. C. Hartshorne との共著も著した本田増次郎(1866～1925)については、先頃長谷川勝政氏によって『英文学者本田増次郎の生涯 信仰・博愛と広報外交』(教文館、2019年)という評伝が出された。
- 7) 野口とHughes が直接親交があったのかは定かではないが、野口の遺稿を分類した『野口文書分類目録』(東京女子大学附属比較文化研究所、1969年)には、野口幽香来簡書の項目に差出人「E.P. Haghcs」の封書、雑稿の部のその他に「御届草書(ミス・ヒューウス)」とあり、Haghcs がHughes の間違いであるならば、二人の直接的な関係性を示唆するものであり、調査の必要があるだろう。
- 8) 二人の婿養子が『新青年』で探偵小説家としても活躍した濱尾四郎である。
- 9) 木村吉次「ミス・ヒューウスによるスウェーデン式体操のすすめ」(『中京体育学論叢』14巻1号、1973年)、高橋春子「明治30年代初めの女子体育論とミス・ヒューウスによるスウェーデン式体操の推奨」(『中京大学体育学論叢』34巻2号、1993年)、池田恵子「英国女性スポーツ史研

究にみるジェンダー空間の分析」(『スポーツとジェンダー研究』14巻、2016年)など。

- 10) 坂倉登喜子、梅野淑子『日本女性登山史』、大月書店、1992年、pp.19-20
- 11) 第一号記載の会員名簿、すなわち設立当初から会員であった人物に「新潟市 上村國子」という名が見られる。新潟県山岳協会(日本山岳会の新潟支部とは別組織)会員の調査で、新潟県立長岡高等学校第一校歌の作曲者である植村クニという人物がそうで、長岡女子師範学校の教師だったらしいことが判明しているが、詳細不明。
- 12) 1892年に日光に移り住み(弟子の小杉は日光出身のため五百城に弟子入りしたが、後に師に無断で出奔)、それを機に翌年のシカゴ万博に「日光東照宮陽明門」を出品した。同じシカゴ万博に同じモチーフで陶製の「日光東照宮陽明門」を出品したのが成瀬誠志で、彼に弟子入りしたのが樋口一葉の次兄・虎之助であった。その兄をモデルとして一葉が書いたのが「うもれ木」である。

参考文献

- 阿部裕二「調査研究 野口幽香子 岩鷲登山記」、『JAC 岩手支部通信』第49号(2019年3月20日)
- 石川啄木「岩手県師範学校校友会雑誌を読む」、『啄木全集』第4巻(筑摩書房、1967年)
- 小原兄麿『巖手山記』(岩手山講社、1920年)
- 久保田柿村舎「女子霧ヶ峰登山記」、『山岳』第一年第一号(1906年)
- 小島烏水「婦人の登山」、『小島烏水全集』第3巻(大修館書店、1984年)
- 小橋玲治「E. P. ヒュースによる女性への登山奨励の余波—タイへの影響も視野に」、『タイ国日本研究論集2019』(チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座、2019年)
- 小林一郎『田山花袋研究—「危機意識」克服の時代(三)—』(桜楓社、1983年)
- 坂倉登喜子、梅野淑子『日本女性登山史』(大月書店、1992年)
- 庄司拓也、松本園子「翻刻資料 二葉幼稚園『園誌』(一九〇六・九—一九一三年)」、『東京社会福祉史研究』9号(2015年)。
- 鳥羽源蔵「岩手山紀行(第一稿)」、『植物学雑誌』第6巻第64号(1905年)
- 新田次郎「女人禁制」、『新田次郎全集』第19巻(新潮社、1976年)
- 野口幽香子「その子の花」、『日本園芸雑誌』第17年第8号(1905年)
- 「初登山(岩鷲登山記)」、『山岳』第一年第三号(1906年)
- 樋口一葉「水のうへ日記」、『樋口一葉全集』第三巻(上)(筑摩書房、1967年)
- 松本園子「『園誌』にみる二葉幼稚園創設期の運営—附・翻刻資料/二葉幼稚園『園誌』(一九〇〇—一九〇六年)」、『東京社会福祉史研究』1号(2007年)
- ミス、ヒュース君演説、安井哲子君通訳「登山に就て」、『婦人衛生雑誌』第149号(1902年4月25日)
- 『岩手学事彙報』第258号(1895年4月15日)
- 『新潟山岳協会ニュース』第320号(2015年9月)
- 『野口文書分類目録』(東京女子大学附属比較文化研究所、1969年)